

《第 12 号》「こっち側とそっち側」

吉永みち子(作家)

例えば、スーパーにマイバッグを持っていく。例えば「環境への負荷を考えた買い物や生活を」なんてことを話す。すると、「えらいですね」「高い意識で」「地球にやさしいですね」という反応が返ってくることもある。この言い方には、こっち側とそっち側というような壁が感じられて、何とももどかしさを感じる。

この壁はいったい何だろう。人間の特性として、一生懸命に取り組んでいる側に入ると、取組まない側を、つい環境に配慮をしない意識の低い人で、この人たちを動かさなければいけないのだといった上から下への目で見えてしまいがちになる。禁煙すると、喫煙している人たちがどうしようもない人に見えるように、目覚めた人は目覚めない人に、どうしてもきつくなるのが常らしい。

だから、おえらい、おやさしい、お高いというニュアンスの反応は、自分の心の底のそんなきつさを映す鏡のような気がする。環境を気遣うことが、やさしいとか意識が高いと言われるのは、やっぱりどこか違う。当たり前なこと、普通の人。誰でも穿いているパンツのようなもの。えっ、そうなの! と思えば、穿かないと結構恥ずかしいぞ。カッコ悪いかも・・・とあわててパンツに走る。そんな流れができた時に、雪崩を打つように人の意識は変わる。うねりを抑止する壁は、実は外だけでなく内にもあるのかも。

以上